

# 「生活教育」における教科書開発に関する一考察

## —「曉荘学校」における「自然科」の「生活用書」作りを例に—

A Research about the Curriculum Development Based on *Life*  
—In the Case of Science Textbook Making in *Xiaozhuang School*—

宋 樹 生 (COE 研究員)

Shusheng Song

### 概 要

「曉荘学校」における「自然科」の授業は、教師がすでにできた教科書を持って教えるのではない。まず、教師と生徒と共に、実際の生活から課題を取り出し、活動をし、その生活の課題を解決するために、「書物」を用いて、活動する。最後に、その活動を記録し、整理して、新しい「書物」すなわち、この課題に関する「生活用書」にする。「書物」は、単に生徒が文字を覚えるための、教師が教える仕事ができるための印刷物ではなく、まず、現在の生活の問題を解決し、あるいは改善することに役立たなければならない。それに、人類の今までの文化、知識への「掛橋」として、歴史につながらなくてはならない。最後に、よりよい生活を送れるために、子どもたちに必要な知識を伝えなければならない。こうした意味では、陶行知の生活教育理論は、書物不要論ではなく、一つの生活用具として、「生活用書」を用いるべきと主張している。

キーワード：生活教育 曉荘学校 生活用書 教科書

### 1. 始めに

陶行知(Tao-Xing-Zhi, 1891—1946)<sup>①</sup>は中国近代において、中国の民族解放の主体形成に大きな役割を果たした教育家である。彼の教育思想と実践は中国新民主主義革命時期の教育建設に大きく貢献したが、中華人民共和国建国後、30年ほど中国では否定的な評価を受けてきた。80年代初期に「偉大な人民教育家」として名誉が回復されて以来、その教育思想と教育実践が当面の教育改革に照らされながら研究されてきている。

陶行知はその生涯において四つの実験学校<sup>②</sup>の教育を手がけているが、本稿で取り上げる「曉荘学校」<sup>③</sup>は、陶行知にとって独特の位置づけがなされうる。なぜならば、彼の教育思想形成史において、「曉荘学校」における実践が非常に重要な役割を果たす<sup>④</sup>からである。この実践の中で、彼の教育思想の発展は、次の二つに整理

することができる。一つは、デューイの理論を転回させて、彼自身の「生活教育」理論を打ち立てたこと。もう一つは、そのため「教・学・為合一」(教学作合一)理論の提起である<sup>④</sup>。

陶行知に関する研究は、中国では、政治的に扱われてきている。1981年の誕生90周年を機に“改良主義者”という評価が改められて、今日、「人民教育家」としての評価が定着しつつある。名誉回復された後、陶行知に関する大量の文章が発表されているが、その殆どは回想録の類であり、陶の教育思想の分析や理論化は質・量ともにまだ不十分である<sup>⑤</sup>。

日本において、早い時期から陶行知の研究の中心的な役割を果たした学者に、斉藤秋男が挙げられる。斉藤による陶行知研究特に陶行知の教育思想分析の特徴は、陶のアメリカ留学における・デューイやモンローラへの師事をその思想の出発点と見なし、彼の教育思想の形成・発



展過程を「師デューイの学説・理論との格闘の過程」ととらえる事、換言すれば、デューイ理論の受容を起点として、その超克の過程としてとらえようとするところにある<sup>⑥</sup>。

近年において、牧野篤は陶行知の生涯に添って、彼の「生活教育」思想の形成過程とその内容を明らかにした一人の学者である。その研究は次のような特徴がある<sup>⑦</sup>。

彼の「生活教育」思想の形成過程とその内容を分析する際、牧野は彼の思想形成過程を次の三つの時期に区分し、その時期区分に即した三部構成とする。

第一期は、陶行知の誕生から「平民教育」運動が終止する1926年7年までの時期である。この時期における陶の思想の特徴は、辛亥革命・中華民国成立を受けて、真の「共和国」実現のための「国民」形成の論理構築を目指したものととらえられる。

第二期は、「平民教育」運動終止後、陶行知が「郷村」教育の重要性に注目しながら、「試験郷村師範」である曉荘学校を設立した1927年から、抗日救国を宣伝するために世界28の国と地域の訪問に旅発つ1936年までの時期である。この時期の特徴は、抗日民族統一戦線結成に向けての大きな社会情勢を背景として、それを担う主体としての「大衆」形成の論理の構築を目指したものととらえられる。

第三期は、抗日救国宣伝のための旅に出る1936年から1946年に死去するまでの時期である。この時期の陶の思想の特徴は、一方で、現実の激しさを増す抗日戦争を闘う主体の形成を重視しながら、他方で、抗日宣伝の旅で得られた抗日戦争勝利への確信をもとに、「民族」解放後の「大衆」解放を見据えた「建国」の課題をとらえようとし、現実の「抗戦」と新しい中国の「建国」とを、それを担う主体の養成において統一的にとらえようとしたことである。いわば「抗戦建国の人材」養成論である。

牧野は、陶行知を教育家としてだけでなく、民主主義の戦士としても取り扱っている。「曉荘学校」の実践も教育の実験より、“抗日民族統一戦線結成に向けての大きな社会情勢を背景とし

て、それを担う主体としての「大衆」形成の論理の構築を目指したもの”ととらえた。

これまでの「曉荘学校」に関する研究は、実践の紹介と現在の学校教育改革にどんな教訓が導き出せるかという研究が多いだが、「学校」の教育実践そのものを対象とした実証的な研究は殆どなかった。

伝統的な教育法は教師が一方向的に教える「教授法」で、陶行知はそれを「教学法」に改革したが、「曉荘学校」における教育実践に基づいて、それをさらに「教学為合一」に発展させた。これは教授と学習を生活実践に結び付け、かつこの実践を中心とする教育法である。この教育法は、書物にある知識を中心に教えるのではなく、生活実践を通じて教え、人間形成を行うのである。「教学為合一」という生徒の行動力の養成の上で、自分の頭で思考する力、独力で問題を分析し、解決する能力を養成する指導法である。曉荘学校の教育実践の中で、陶行知は教員という名称を指導員に改め、生徒の自主的学習を強調した。陶行知がその教育方法論に関して主張していた「力を労する上で心を労する」「行動は学習の始まり」(行是知の始)という見解は、中国における教育の伝統的な概念を一新した。

本稿は、「曉荘学校」において「生活教育」の実践的な教科書がいかにつくられ、いかに理論的に意義づけられ、かつどのような体系をもって実施されていったのかという基本的課題を解明する一つの作業として、陶行知における「書物」に関する視点から陶行知生活教育論の意義を究明することを目的とする。

## 2. 「生活教育」と「生活用書」

### (1) 「真知」を獲得する手段としての「生活教育」

陶行知の著作の中で、最も早く生活教育理念について論じたものは、1922年『時事新報』に載せられた「生活教育」である。そこで、陶行知は、始めて、英語で「Education of life, Education by life, Education for life」<sup>⑧</sup>すなわち、「生活の教育、生活により行う教育、生活のための教育」と述べている。1934年、彼は、



「生活教育は、生活の教育、生活それ自体によって行う教育、生活に必要な教育である。教育の根本的な意義は、生活の変化であり、生活はいつでも変化しているから、生活はいつでも教育の意味を持っている。」<sup>⑨</sup>と説明している。

この「生活教育」の定義を読むと、陶行知が生活教育の必然性を強調していることがわかる。つまり、生活をする子どもは、生活という環境の影響を濾過することによって自ら連続的发展を可能ならしめるのである。かくて陶行知は言う。「我々は生活の闘いの中から真理を追求していかなければならない。我々が深く突きつめていけばいくほど、より一層生活の変化は教育の変化であることがわかってくる。」<sup>⑩</sup>

生活の変化、したがって教育の変化を起こすのは、あくまで生活者の主体的な人間性に根ざした主体性であって、これが生活教育の前提であり、出発点である。この点を陶行知は次のように説明している。「生活と生活が摩擦すると、ただちに教育の作用が起こる。摩擦するものと摩擦されるものとの双方が変化を起こし、双方が教育を受ける。ある人は、これは『生活』と『教育』の対立であり、つまりは『生活』と『教育』の摩擦であるという。私は、教育とは多くは生活の反映した影であって摩擦を起こす作用はもっていないと考える……もっと正確に言えば、ある種の教育を受けた生活と、ある種の教育を受けていない生活とが摩擦を起こすと、そこに生活の火花が発生する。これがまさしく教育の火花であり、生活の変化が起きれば、これが教育の変化である。」<sup>⑪</sup>

「生活」が環境との相互作用の中で発展して行くが、その正常な作用の仕方は、対象的事物との動的関連の中に見いだされるものであった。すなわち教育の作用を生む生活と環境との摩擦は、「行動の主導的地位から発する」のである。子どものあり方を「活」に求めた陶行知は、読書のみに傾注し、実際生活と分離している伝統的な教育の過りを子どもの人間性不在に見出し、「活」の顕現を以って真に子どもが自らを實現していく知、すなわち「真知灼見」の獲得を可能としたのである。「行動的」ということを生活

教育の特質とおる彼の主意はここにある。かくて陶行知は、「活」と「教育」の結合を暗示する行動を次のように強調する。

「人類と個人の知識の母は、すべて行動である。行動が、理論を生み理論を発展させる。行動が生み出し発展した理論は、さらに行動を指導するために生活全体をより高い次元に引き上げていく。生活の満足と存在を闘い取るために、この行動は理論、組織、計画を伴う行動を必要とする。」<sup>⑫</sup>

上記のように、「生活教育」の「生活」として、「在環境」の原理、すなわち「主体が環境に働きかける」という原理を指摘することができる。つまり、「社会という偉大な環境の中であって人々全てを我々の先生とすることができ、仲間とすることができ、また生徒とすることができ。自然という環境の中で、手に触れるもの全てが活書であり、学問であり、技術である。」<sup>⑬</sup>のである。

## (2) 「生活用書」としての教科書

陶行知は、伝統教育に使われた文字中心の教科書の誤りを次のように指摘する「文字中心の教科書の誤りは、文字を教えること即ち教育と考えていることであって、文字を教えること以外に教育を考えていないことである。文字中心の教科書は、実のところ、先生が講義するには便利であり、生徒は、静かに聴いているわけだ。そこで、講書・聴書・読書が、正規の教育において、ほとんど全部の時間を占めることとなった。このやり方は、人に座っていて語らせることはするが、人を立ち上がらせ行動させることはしない。」<sup>⑭</sup>

この文字中心の教科書に対して、生活教育における教科書の位置について、彼は次のように説明する。「われわれの書物に対する根本的な態度—すなわち、書物は一種の用具である。一種の「為すこと」の用具である。一種の生活の用具である。用具は人の役に立つものであり書物も人の役に立つものである」<sup>⑮</sup>。陶は、このような「為すこと」の用具である一種の生活の用具としての教科書を「生活用書」あるいは「教



学作指導」と呼び、「生活教育は、われわれに指示している。『どのような生活をおくるかに即して、どのような書物を用いるか』『教学作合一の理論は、われわれに指示している。『どのような事を為すかに即して、どのような書物を用いるか』<sup>⑥</sup>と説明している。

その「一種の生活の用具」としての教科書の編集には、次の三点がその基準となる<sup>⑦</sup>。

- ① その書物は、人を行動に導く力があるか、否か。
- ② その書物は、人を思索に導く力があるか、否か。
- ③ その書物は、人を新しい価値を生み出すことに導く力があるか、否か。

この基準に従って、教科書の開発の計画を実現するには、子どもの発達段階、生活環境などを考えた上で、次のことをしなければならない。

「各専門分野の専門家のうち何人かは、子どもに接近すること、あるいは決意して、数年、小・中学校の教員を務めること、このようにして、一方で実験、もう一方で教学作指導の編集にあたること」「子どもに接触している小・中学教員の何人かは、それぞれ科学の専門研究につとめ、その上で、教学作指導編集に参加すること」<sup>⑧</sup>。このように、「生活教育」の教科書の開発には、子どもたちの生活している「環境」を基にして、「専門家」と「教員」たちが共同作業をすることになるだが、その中心になるのはまさに「子ども」である。「生活教育」はただの現在している生活のためにのみ行う教育ではなく、歴史、将来にもつながらなければならない。しかし、その基礎は、「現在」であり、書物は子どもの知識の「接木」として、「活用」しなければならない。

### 3. 「曉荘学校」における「生活用書」の開発

ここで、「曉荘学校」における小学自然科の授業を例にして、「生活用書」の実際的な編集法を明確にしたい<sup>⑨</sup>。

#### 内容：濾過器の製造

##### 一 水の検査と討論

事前の準備：A 顕微鏡；B 水鉢；C 子

どもの参考書—水を清潔にする方法が書いてある本と水の知識が書いてある科学普及用書

私たちの学校は南京から五扣離れた村にある。学校の裏側に川があるが、南京とつながっているため、南京の汚水はそこに入ってくるので、川の水はすでに汚染された。私たちの村の近くにもう二つの村があって、村人はその川で米を洗ったり野菜を洗ったりしている。食用水は井戸水であるが、その井戸水も汚染された川の地下水が流れ込み、飲むと、少しくさみを感じる。

村の子どもたちはお湯を飲む習慣を身に付けていない。だから、のどが乾いた時、運動後、子どもたちはそのまま生水を飲んでいる。ある朝の会議の時、私たちは一つの意見を出した。それは「生水の飲用は禁止」である。その時、いろんな質問があった：

S：「なぜ生水は飲めないの？」

S：「生水の中になにかあるの？」

T：「よし、それでは科学の授業でゆっくり討論しましょう。」

会議が終わって、わたしは図書室で生徒たちと一緒に水に関する参考書をさがした。

S：「さっき、君たちは水に関して沢山の質問を出したから、今から討論しましょう。だけれど、水に関して討論するために、水を見て研究しなければならないね、さあ、誰か水を汲んで来てくれる？」

T：「僕がいきます、水鉢で川から水を汲んで来ていいのですか？」

T：「見て、この水鉢の中になにかある？」

S：「青浮き草がただよっているね」

T：「それ以外に、なにがあるか見えない？」

S：「なにもないよ。」

T：「君たちの目では見えないかもしれないけど、でも、あるものは君たちの目に役にたつよ。」

S：「先生、私は知っている、顕微鏡をもってくるわ。前回の授業で私たちは顕微鏡で髪の毛を見て、一本の毛でも縄より太く見えた、すごくきれい！」

T：「順番に一人ずつ見てよ。」

その時、一人の生徒は顕微鏡のレンズをあわせて、ガラスの上に一滴の水を滴り、顕微鏡で検



査する。そして、彼は何か見えたら、他の生徒たちを呼んで一緒に見る。

T:「皆もう見ていたね、では、なにが見えた？」

S:「水の中に沢山の黒い粒があります。」

S:「またあります、何か水の中で動いている。」

T:「その黒い粒はね、水の中にある不純物だよ。そして、その動いているものは微生物だ。こんな水はきれいかな？」

S:「汚い」

T:「汚れている水を飲むのはいいの？」

S:「よくない、その微生物はお腹の中で動いているよね。」

T:「私たちは汚れた水をどうやってきれいにすることができるか、君たちは参考書の中で何か見つけた？」

S:「沈殿法、煮沸法・・・」

S:「蒸溜法・・・」

S:「もうひとつは濾過法・・・」

T:「誰かこの四つの方法について説明してくれる？」

S:「私が説明する：煮沸法は鍋で水を煮沸する方法だ；沈殿法は明礬を粉にして、水にいれて、汚いものを沈める方法だ；濾過法と蒸溜法はまだはっきり分からないけど・・・」

T:「蒸溜法は蒸溜器を使わなければならない、今日は討論しない。濾過法は本に載っている、みんなはちゃんと読んでね。」

T:「どの方法を使ったらいいかなあ？」

S:「煮沸が一番いいよ、わたしの家では使っているから。」

S:「水が沸いたのは確かだけど、汚れ物はまだ残っているよ。」

生徒aは反対の意見をだした。

S:「明礬が一番いいよ」

生徒bが言った。

A:「明礬はちょっと渋いじゃないの？」

生徒aは言い返した。

S:「そうしたら、濾過法しかないね。でも、濾過法は砂、石と炭など沢山の材料が必要だから、ちょっと大変ではないかな？」

生徒cはこう言った。

T:「僕も濾過法の方がいいと思う。なぜかとい

うと、水を濾したら、中の汚れ物はなくなるから。砂と石は簡単に見つかるし、炭と缶は市場で買ったらいいいし。」

S:「よし、私たちは濾過器を買ってきます。他の材料は誰が買うの？」

S:「リーダを決めましょうよ、ひとつの材料は四人で担当しよう。」

生徒aは提案した

そして、の結果は：

① 生徒a,b,c,dは炭を買う；②生徒e,f,g,hは缶を買う

② 生徒i,j,k,lは石を採る；④生徒m,n,o,pは砂を採る

③ 先生はシュロとスポンジを買う

S:「いつからやりますか？」

リーダは皆に聞いた。生徒たちの相談の結果、今日は休んで、明日の自然科の授業で各グループに分けてやることになった。それで、討論会が終了し、リーダは解散の指示を出した。

## 二 濾過器の材料の準備：

私たちは材料を買う前に、討論会で以下のことを決めた：

① 材料の量：

A 缶は一つ 直径33ミリ；B 炭は4キロ；

C 砂は7.5キロ；D 砂と石は各7.5キロ；

E スポンジは一つ；F シュロは六つ；

② 材料を集める方法：

A 缶は市場で買う；B 石と砂は市場の近くで拾う；

C 炭は雑貨店で買う；D シュロは縄店で買う；

E スポンジは書店あるいは薬屋で買う。

それで、実行の結果は以下のように：

1 缶 一つ、五角；2 炭 4キロ、五角五分；

3 砂と石 市場の近くにある建築現場からもらった；4 スポンジ 一角五分；

5 シュロ 四角。

T:「濾過器の材料を買うためにいくらかったか誰が計算できる？」

S:「ちょうど一元六角です。」

## 三 濾過器の製作



濾過器を作る前に、もう一回の討論会をした。

T:「砂の洗い方、皆分かるか？」S:「水であらいましょう。」

T:「それは正解だけど、竹で作った網あるいはちょっと大きめの缶を使わなければならない。そして、砂をそこにいれて、水で濯ぎ、洗いながら手で揉む。そしたら、砂の中の不純物や泥などが自然にとけてしまうし、砂はまた底に沈んでいる。そして、表面に漂っている汚水を捨てて、澄むまでずっと水で濯ぐ。誰かやってくれる？」

S:「c君、わたしたち四人でやろうよ」T:「石を洗うのは誰だ？」

S:「d君、e君、私たちが担当しよう。」

T:「砂を洗うのは、まず、石を竹の網の中にいれて、水で濯ぐ。見て、混ざっている泥は落ちただろう。きれいになるまでずっと手でひっくり返すのだ。」

S:「F君、わたしたちは炭を敲こう。」

T:「炭はあまり細かくしないでね、そして敲いた後水で洗いなさい。」

S:「g君、h君わたしたちは水をもっとこうか。」

T:「誰が缶を洗うの？」S:「I君、J君、いこう」

生徒たちは楽しく自分の仕事場にいて、担当したことをやってくれた。そして、本を参考にしながら濾過器を造った。

S:「見て、私たちの濾過器は完成したよ、速く汚れた水をいれて！」

生徒たちは一緒に叫びだした。水をいれて、待つだけだ。一分、二分・・・きれいになった水はまだ出ない。しかし、ようやく一滴の水は缶の縁に沿ってゆっくり落ちて来た。もう少し待っていたら、また同じことが起きた。

S:「ちょっとスポンジを埋めすぎたのではないだろうか、水が出ないよ。」

S:「石と砂をだして、もう一度スポンジを埋めなおそうか？」

何人かの生徒が石や砂や炭を出した。そして、彼らは海綿を取り出して、水で洗って、再びセットした。

S:「まず、試験管で試して、流れてくるかどうか

かを見よう。」

T:「流れてくるのは確かだけど、前と同じに縁にそって落ちるよ、どうすればいいの？」

S:「竹のパイプを入れよう。」

S:「そうしよう、私たちのおしこのように水はパイプから出るよ！」

T:「炭と砂をいれよう。」

S:「あっ、しまった、砂、石と炭は混ざってしまったよ！」

a君とb君は砂を入れると、さっき缶を掃除する時に砂と石を混ぜてしまったことを気づいた。

T:「さあ、一緒にそれを分けよう、もし足りなかったら、もうちょっととってきたらいい。でも、あまり長く続いたら濾過器は汚れてしまうので、しょっちゅう砂と石を出して洗ってね。さっきのように砂と石を取り出す時混ざってしまうと、大変だから、どうしたらそのようなことを防げるのかをみんな一緒に考えよう。」

S:「あっ、思い出した、炭と砂の上にシュロをいれたら、それを出して洗ったら、砂と石は混ざれないだろう。」

皆もう一度濾過器を組み立てて、そして、水をいれた。最初は一滴一滴流れてきたが、だんだん水流が太くなってきて、小指のようになった。

S:「なぜ思ったようにきれいになっていないの？」

T:「皆あきらめないで、それははじめて流れてきた水なので、そして石と砂は完璧にきれいに洗われなかったから、ちょっと汚いのは当然なことだ。二回目の水を見よう。」

生徒たちは再び汚れた水を出して、濾過器に入れた。

S:「見て、水は澄んだよ。」

T:「飲んでみて、濾過されていない水とどこが違う？」

S:「濾過された水は辛くない、おいしい！」

皆が、自分で造った濾過器で汚い水をきれいにした。最後に、生徒皆もう一度グループで最初から最後まで過程を思い出して、整理して、記録した。各グループのリーダーが教師とそれらの記録を整理し、この課題に関する新しい「書物」にする。それから、生徒たちが、その新し



い「書物」を用いて、自分の家で、近所の人にも、濾過器を造った。

上記のように、「暁荘学校」における「自然科」の授業は、教師がすでにできた教科書を持って教えるのではない。まず、教師と生徒と共に、生徒の実際の生活から課題を取り出し、その生活の課題を解決するために、すでにあった「書物」を用いて、活動する。最後に、生徒と教師一緒にその活動を記録し、整理して、生徒達自分の新しい「書物」すなわち、この課題に関する「生活用書」にする。

その「生活用書」あるいは「教学作指導」は、どのような編集法をとるのか？「まず、第一、現代の社会生活あるいは生活力を列举し、これを生活全体の系統に分類した上で、その生活の系統に即して書物の系統を編成する」<sup>⑩</sup>陶行知は、具体的に次の例を挙げている

「養成しなければならぬ生活力」：1) コレラの予防—10) 衣料の選択；11) 野菜の栽培—掃除；21) 換気—50) 天体観測；51) 脚本構成—60) 話しかた；61) 恋愛—70) 五生世界の創造

「用いなければならぬ書物」：1) コレラの予防の指導—10) 衣料の選択の指導；11) 野菜の栽培の指導—掃除の指導；21) 換気の指導—50) 天体観測の指導；51) 脚本構成の指導—60) 話し方の指導；61) 恋愛の指導—70) 五生世界の創造の指導

これを類別すれば、1—10 は健康生活に属し、11—20 は労働生活、21—50 は科学生活、51—60 は芸術生活、61—70 は社会改造生活に属する。従って、「暁荘学校」においての教育実践を、1, 健康の教育；2, 労働の教育；3, 科学の教育；4, 芸術の教育；5, 社会改造の教育<sup>⑪</sup>。五つの類別に分けられる。前述のように、これらの教育を実現させる教科書の開発には、各専門分野の専門家か小・中学教員が子どもたちの生活している「環境」を基にしてつとめる。

しかし、その専門家や教員達に開発された「生活用書」の利用は、従来のように、教師が決まった時間に、決まった内容を教壇で一生懸命に本を持って、説明し、生徒がじっと座って、本を読みながら、先生の話聴くのではない。生

活を中心とした授業は、時間、空間にこだわるべきではなく、その生徒たちの生活環境、生活実態、または発達段階、興味に応じて、「活用」すべきである。その「生活」は、教師、教育機関、あるいは親たちによって決められた「生活」ではなく、子供たち自身が日常に過ごしている「生活」のである。教師の指導、すでにあった「書物」は生徒たちの実際生活における課題を解決するために、子供たちの「接木」として、その「生活」の役に立って、子どもたちの知識を発展させて行く手段である。生徒達が自分の生活課題を解決するために、一つの「用具」として、「書物」を用いて、活動する。最後に、自分の新しい「書物」すなわち、この課題に関する自分達の「生活用書」にする。これがまさに、「生活教育」における「書物」に関する理論の本義である。

#### 4. 終わりに

清朝末期から始まり、日本および西洋工業国の教育を手本にした新教育運動は、中国教育の近代化にとって大きな役割を果たしたものであるが、文化背景と社会状況の違った国の教育制度をそのまま模倣すると問題も多く生じた。特に、工業国の教育経験は農村地域の教育の発展に役立たず、逆に農村青年の農村離れを導いた。農村教育実践運動は20年代から30年代にかけて全国各地で広く展開されていたが、その中に、もっとも注目を浴び、中国の近代教育の改革と発展に大きな影響を与えたのは、陶行知の農村生活教育実践であった。この教育実践は「洋八股」（外国教育の模倣）に反対し、教育と生産労働との乖離に反対し、教育を農村社会と結びつけようとするものであり、農村の社会生活の向上に寄与しようとするものであった。その農村生活教育実験の思想的基礎は「生活教育」理論であった。

生活教育における教育の意義は、生活主体である子どもが、そして生活の営みそのものが、現在あるがままの状態にとどまりえないのもあるとことに存在するのである。現実の自己及び生活を変革しつつ新しい自己と生活を樹立する



こと、すなわち旧きものの変革と新しきものの創造という二種の課題を背負って、変革と創造を同時的に進める使命を担うものとして教育があるのである。そしてこの変革と創造には、一個人としての自己の生活の範囲をこえた第二の次元が必要とされる。その生活主体である子どもたちの成長に、「書物」は、単に生徒が文字を覚えるための、教師が教える仕事ができるための印刷品ではなく、まず、現在の生活の問題を解決し、あるいは改善することに役立たなければならない。それで、実際の生活から課題を取り出し、活動をし、その生活の課題を解決するために、「書物」を用いて、活動する。最後に、生徒と教師がその活動を記録し、整理して、生徒達自分の新しい「書物」にする。それに、人類の今までの文化、知識への「掛橋」として、歴史につながらなくてはならない。最後に、よりよい生活を送れるために、子どもたちに必要な知識を伝えなければならない。

こうした意味では、生活教育理論は、書物不要論ではなく、一つ的生活用具として、「生活用書」を用いるべきと主張している。その「生活用書」の開発には、子どもの「為すこと」を基にして、子どもの実際生活から、発展していかなければならない。したがって、生活を中心とした教科書は、子どもたちが生活する環境、すなわち、子どもたちの生活している時間、空間など実際的な環境によって異なるべきである。

## 註：

- ① 陶行知の生年月日については、議論がある。例えば、夏徳清氏の1892年11月5日説、もう一つは周洪宇氏の1893年11月10日説である。中国において、従来の定説では、陶行知の生年月日は1891年10月18日（清光緒17年旧暦9月16）とされ、中国共産党・政府が実質的にこれを公認として様々な行事を進める一方、陶の死後出版された出版物は、死後初の記念集や新中国成立後初期のものも含めて、ほとんど1891年10月18日を陶の生年月日として採用している。それから、この

説は陶の関係者（親族、学生や友人）にも支持されている

その四つの実験学校は、本稿で取り扱われている「曉荘学校」の他に、「山海工学団」、「育才学校」、「社会大学」である。

- ② 「曉荘学校」は、もともとは「実験郷村師範学校」の名前となって、陶行知のアメリカで学んだ実験主義の重視を表す。しかし、本稿に書いたように、実際は、この学校に「師範学校」のみではなく、幼稚園、小学校も含まれている。これで、もっと広い意味で「曉荘学校」とも呼ばれている。筆者は、ここで区別しなく、「曉荘学校」にする。
- ③ 「曉荘学校」は、もともとは「実験郷村師範学校」の名前となって、陶行知のアメリカで学んだ実験主義の重視を表す。しかし、本稿に書いたように、実際は、この学校に「師範学校」のみではなく、幼稚園、小学校も含まれている。これで、もっと広い意味で「曉荘学校」とも呼ばれている。筆者は、ここで区別しなく、「曉荘学校」にする。
- ④ 斎藤秋男 『陶行知生活教育理論の形成』、明治図書、1983年、pp. 19-20
- ⑤ 牧野篤 『中国近代教育の思想的展開と特質—陶行知『生活教育』思想の研究—』、日本図書センター、1993年、p27.
- ⑥ 同上書、p. 21
- ⑦ 同上書、pp. 32-36
- ⑧ 陶行知 「活的教育」、華中師範学院教育科学研究所主編『陶行知全集』（全8巻）、湖南教育出版社、1983—1992年、第1巻（1985年）、pp. 175-187（なお、この文献については、以下『全集』と略記し、巻数はローマ数字で表記することとする）。
- ⑨ 陶行知 「生活教育」、『全集』Ⅱ、p. 633
- ⑩ 陶行知 「生活教育之特質」、『全集』Ⅲ、p. 25
- ⑪ 同上、pp. 25-26



② 同上, p. 26

③ 陶行知「生活教育」,『全集』Ⅱ, p. 634

陶行知は、知識を「真」と「偽」に分類した上、書物について、次のように論じている「われわれは、書物というものは一種の用具であって、鋤や鍬と同様に人間のために役に立つべきだと言うことを明確にしなければならない。われわれは、「読書」というよりも、むしろ、「用書」を言うべきである。書物には、真知識と偽知識とがあるが、通り一遍読んだだけでは容易にその真偽を弁別できないものだ。しかし、それを一たび用いてみれば、書物の本来の面目は、たちどころに明らかになる。真知識の本は、実際の役に立つし、偽知識の本は、用いようにも用いようがない。」さらに、彼は、従来の「読書」のみ重視した教育を批判し、それを「死んだ教育」と呼んでいる。その「死んだ教育」から「活教育」に戻らなくてはならないと、彼が主張した。「真をとり偽を去ることを決意することが、生への道に踏み出す第一歩である。偽知識を買い

取っていた主はすでに死んでいるのだが、この復活の根を絶つことが、生への道に踏み出す第二歩である。「読書」人あるいは「教書」先生たることを、最も恥すべきこととすること。これが生への道への第三歩である。およそ、手と心とを等しく働かせること、「力を労する」上に「心を労する」を行うこと、こうすれば千里の駒に乗って、生の道を歩むことができる」

④ 陶行知著、齊藤秋男訳『民族解放の教育』, 明治図書, 1975年, p. 58

⑤ 同上, p. 55

⑥ 同上, p. 55

⑦ 同上, p. 61

⑧ 同上, pp. 62-63

⑨ 陶行知主編、鄭先文著、『曉莊叢書之一小学自然教学作』, 上海兒童書局, 1934年, pp. 40-51

⑩ 陶行知著、齊藤秋男訳『民族解放の教育』, 明治図書, 1975年, p. 59

⑪ 同上, pp. 59-60